第４回さいたま市公民館運営審議会（第１３期）会議

日時　　令和８年１０月２６日（月）午後２時３０分～
場所　　生涯学習総合センター10 階　多目的ホール

次　第

１　開　会

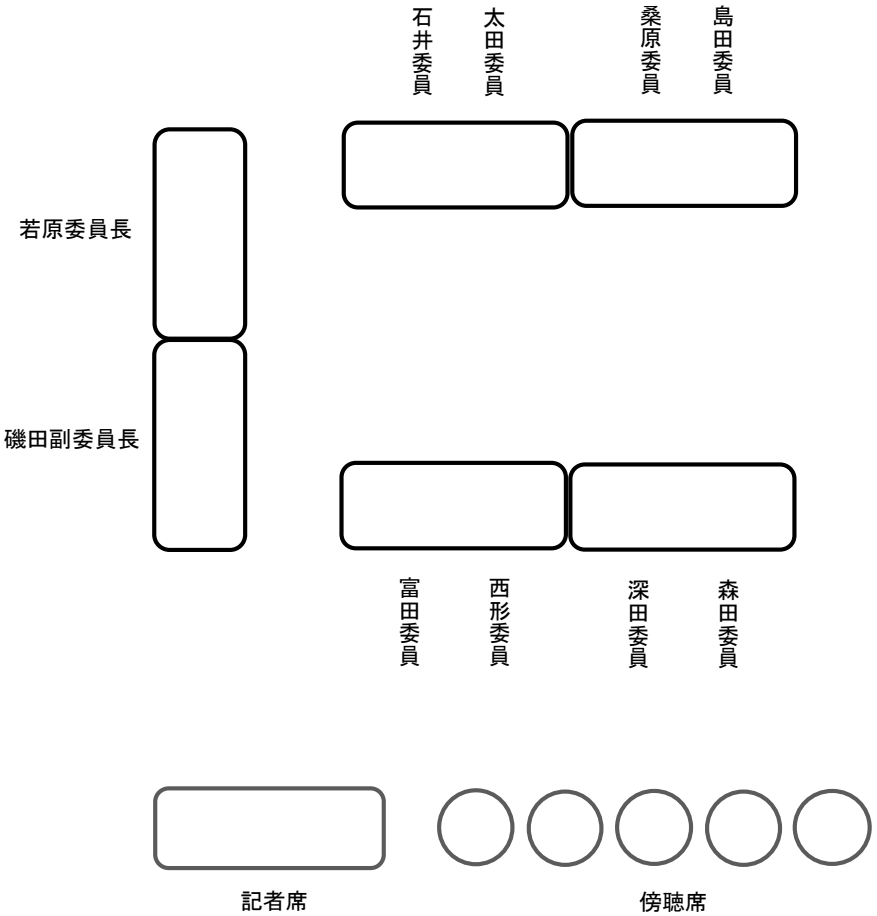
２　報告事項
（１）前回会議録について
（２）モデル公民館の取組について

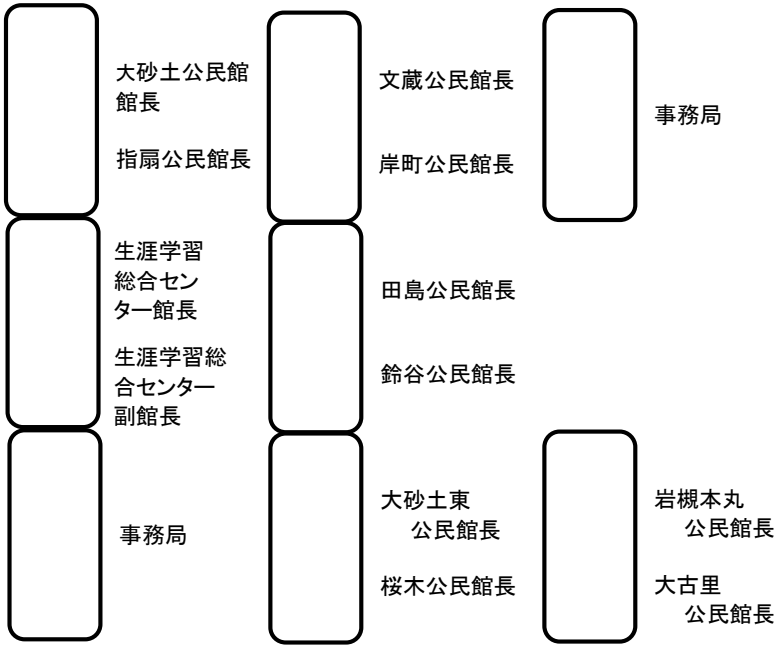
３　議　題
（１）さいたま市公民館ビジョンの振り返りについて

４　閉　会

第4回さいたま市公民館運営審議会会議（第13期） 席次表

令和8年10月26日（月）
生涯学習総合センター 10階
多目的ホール





第３回さいたま市公民館運営審議会　議事録

１　開催日時

令和８年７月 27 日（月）　午後２時 30 分から午後４時 00 分まで

２　開催場所

さいたま市立生涯学習総合センター　10 階　多目的ホール

３　出席者

〈委員：10 名〉

① 若原　幸範　委員長
② 磯田　三津子　副委員
③ 石井　博　委員
④ 太田　祐子　委員
⑤ 島田　正次　委員
⑥ 白石　徳一郎　委員
⑦ 富田　敏弘　委員
⑧ 西形　恵美子　委員
⑨ 深田　弘行　委員
⑩ 森田　真紀子　委員

〈事務局：17 名〉

生涯学習総合センター

①	館長	金子　博臣
②	副館長	大城　冬樹
③	調整幹	岸　聖一
④	主幹兼事業・企画係長	山田　浩行
⑤	事業・企画係主査	蜂谷　香織
⑥	事業・企画係主任	佐藤　功宗
⑦	事業・企画係社会教育指導員	田山　基子

拠点公民館

①	西　区　指扇公民館館長	菅野　剛史
②	北　区　大砂土公民館館長	内ヶ嶋　直哉
③	大宮区　桜木公民館館長	細井　規夫
④	見沼区　大砂土東公民館館長	茂木　深雪
⑤	中央区　鈴谷公民館館長	貫井　直美
⑥	桜　区　田島公民館館長	舟腰　祐子

⑦　浦和区　岸町公民館館長　　河原塚　政行
⑧　南　区　文蔵公民館館長　　塚越　修
⑨　緑　区　大古里公民館館長　酒井　浩志
⑩　岩槻区　岩槻本丸公民館館長　石関　達

4　欠席者

〈委員：２名〉

①　桑原　静　委員
②　小林　玲子　委員

5　議題

さいたま市公民館ビジョンに基づく取組について

6　配布資料

（１）第３回さいたま市公民館運営審議会（第 13 期）次第
（２）第３回さいたま市公民館運営審議会（第 13 期）席次表
（３）第２回さいたま市公民館運営審議会（第 13 期）議事録
（４）【資料】公の施設に係る使用料見直しの基本的な考え方
（５）【資料】さいたま市公民館ビジョンの振り返りの観点
（６）【資料】議題　さいたま市公民館ビジョンに基づく取組について

7　公開・非公開の別

公開

8　傍聴者の数

０名

9　内容

（１）開会
（２）挨拶
（３）報告

前回会議録について報告を行った。

資料に基づき、「公の施設に係る使用料見直しの基本的な考え方」が策定された旨の報告を行った。

（４）議題「さいたま市公民館ビジョンに基づく取組について」

前回の審議会で示された「さいたま市公民館ビジョンの振り返りの観点」に基づき、事務局から各種実績資料について説明を行った。

【質疑応答・意見】

〈若原委員長〉

まず、前回は公民館ビジョンの振り返りをどのように行っていくのかという点について議論した。また、ビジョンの３つの行動目標である「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」それぞれの取組を振り返ることの重要性が確認されたと同時に循環という観点も挙げられた。「人づくり」から「つながりづくり」につなげていく、「つながりづくり」から「地域づくり」につなげ、また、それらが１つにつながっていく、間をつないでいく観点も大切であるという意見が出されたと思う。

本日は、前回出されたさまざまな観点を踏まえながら、主に量的な側面からビジョンをどのように振り返るのか、次期ビジョンにどのようにつなげていくのかについて議論していきたいと思う。

〈深田委員〉

議題資料５ページの ICT 講座の実施状況を見ると、60 館で年間 133 事業となっており、１館当たりに換算すると年間約２事業、実施回数ベースでも４回程度にとどまっている。このことから、現時点では、さいたま市公民館ビジョンの柱として位置付けるほどの取組規模には達していないのではないかと考える。また、さいたま市が推進する「さいたま市みんなのアプリ」を活用した「さいたま市プレミアムデジタル商品券」の申込状況を見ると、30 代未満が 7.2%、30 代が 15.7%であるのに対し、70 代以上も 14.6%を占めており、必ずしも若年層の利用割合が高い状況とはいえない。こうした状況を踏まえると、公民館ビジョンにおける ICT の位置付けについて取組の実態や目的を改めて整理し、再検討する余地があるのではないか。

また、外国人との共生という観点にも関連するが、令和７年度さいたま市公民館要覧を見ると、令和６年度事業として国際理解事業が９回実施されたと記載されている。一方で、資料２ページには国際理解事業に関する項目が見当たらない。国際理解事業の事業数の推移について伺いたい。

〈事務局〉

国際理解事業については、資料２ページでは「その他」の項目に含めて整理している。事業数は、令和６年度が９事業、令和７年度が８事業となっている。

〈深田委員〉

令和６年度の国際理解事業は、参加延べ人数 2,385 人、延べ実施回数 85 回となっている。こうした取組を充実させていくことで、文化の違いなどに対する相互理解が進み、人々の融和にもつながるのではないか。今後、多文化共生や異なる文化的背景を持つ人々との交流を促進し、人と人とのつながりを生み出す取組はますます重要になると考えられることから、国際理解や多文化共生に関する取組を「つながりづくり」の観点に位置付けることも検討してはいかがか。

〈若原委員長〉
ただいま、大きく２点のご意見をいただいた。１点目はICTについてで、現在のビジョンを策定した時期はコロナ禍であり、また、国の方針としてSociety5.0の推進が掲げられていた時期でもあった。そのような背景のもとでICTが位置付けられた経緯があるが、次期ビジョンにおいても引き続き重要な柱として位置付けていくのかというご意見であったと思う。
２点目は、多文化共生や外国にルーツを持つ市民への対応についてだが、これについては前回の議論でもご意見があったが、今後、国際理解事業の充実を図りながら、多文化共生や人と人とのつながりづくりにつなげていくことが重要ではないかとのご意見をいただいた。それでは、事務局から補足を。

〈事務局〉
ご意見ありがとうございます。公民館によっては、日本語ボランティア養成講座や「やさしい日本語」に関する講座を実施しており、それをきっかけにサークルが立ち上がる事例もある。これらの事業については、国際理解事業ではなく別の事業区分に整理している場合もあり、年間の実施数はそれほど多くないが、資料上は国際理解事業の件数としては表れていないものの、関連する取組は行われていることを補足させていただく。

〈若原委員長〉
事務局の説明のように国際理解を主題とした講座だけでなく、例えば子育てサロンに外国にルーツを持つ方が参加するといったこともあるかと思う。そのような取組は、必ずしも国際理解事業として分類されるものではないが、多様な人々が出会い、交流する機会となっている。そうした日常的な交流の中で相互理解が深まり、人と人とのつながりが生まれていくという側面もある。その点も踏まえながら引き続き議論していければと思う。ほかにご意見はいかがか。

〈島田委員〉
地域運動会は、地域づくりにおける伝統的な事業であると考えている。地域によっては、公民館の関わりが以前に比べて薄くなっている状況も見受けられるが、地域住民の交流や地域コミュニティの活性化につながる取組であることから、公民館には今後も地域活動への積極的な協力を期待したいと思う。人的な支援については、職員体制を踏まえれば大きな負担を求めるものではないが、「地域づくり」を掲げるのであれば、公民館には地域との関わりを積極的に持っていただきたい。

〈若原委員長〉
今回の資料は主に事業数や実施回数などの量的なデータを示したものだが、公民館と地域との関わりや、それぞれの地域における歴史的な経緯などは次期ビジョンの検討に当たっては重要な視点になると思う。

〈深田委員〉
一方で、自治会加入率は 55%を下回る水準となり、年々減少しているという現状がある。地区運動会や文化祭については自治会が主体となって実施している地域もあるが、予算や会場確保等の課題もあり、地区運動会事業は全体として縮小傾向にあると伺っている。地区運動会は地域住民の交流に資する重要な取組である一方、資料では令和５年度から令和７年度にかけて事業数が６件から 11 件となっており、増減率では 83%と大きく増加したように見えるものの、事業数全体に占める割合は大きくない。
公民館全体の方向性を考える上では、地域コミュニティを支える取組の意義を踏まえつつ、個別事業の実施件数だけでなく、市民参加の規模や事業効果なども勘案しながら、何を重点的に推進していくべきか検討する必要がある。

〈若原委員長〉
貴重なご意見だったかと思う。それでは、ほかにいかがか。

〈石井委員〉
資料３ページの各公民館が設定した３つの行動目標のうち、重点的に取り組む行動目標の推移と、資料４ページの３つの行動目標別事業実施実績との関係について伺う。 重点的に取り組む行動目標としては「つながりづくり」を掲げる公民館が増えているが、実際の事業数を見ると「人づくり」が最も多くなっている。目標設定と実施状況との関係について、改めて整理・検証する必要があるのではないか。

〈若原委員長〉
事務局からいかがか。

〈事務局〉
ありがとうございます。資料３ページと４ページの内容に違いが見られるのではないかというご意見かと思う。資料３ページは、各公民館が「何に力を入れたいか」、「何を重点的に取り組みたいか」という観点で回答したもの。一方で、資料４ページは実際に実施した事業数を集計したものなので、ご指摘のとおり、「人づくり」の事業数が多いという結果になっている。そのため、両者が完全に一致しているかといえば、必ずしもそうではないが、資料３ページについては各館の重点的な取組の方向性を示したものとしてご理解いただければと思う。

〈若原委員長〉
事業数としては、多様な学習ニーズに対応する必要があることから、「人づくり」に関する事業が多くなっているのだと思う。一方で、「つながりづくり」は、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」を結び付ける要となる部分であり、各館が重点的な取組として位置付けている状況が見て取れるのではないか。それでは、ほかにいかがか。

〈磯田副委員長〉
関連して、資料４ページについて伺う。令和７年度の事業数を見ると、「人づくり」が最も多く、「地域づくり」が最も少なくなっている。一方で、延べ参加人数を見ると、「地域づくり」が最も多くなっているが、このことは「地域づくり」に関わる人が多いと捉えてよいのか。また、単に参加人数が多いだけでなく、同じ方が繰り返し参加しているのか。事業数だけを見ると「地域づくり」は少なく見えるが、このような継続的な関わりをどのように評価しているのか伺いたい。併せて、13 ページについて公民館で活動するボランティア団体とは、どのような団体を指しているのか。例えば、生涯学習総合センターで、私の学生が日本語支援のボランティア活動を行っているが、資料ではそうした活動が確認できなかった。どのような基準で調査し、項目立てを行ったのか伺う。

〈事務局〉
まず１点目については、「地域づくり」の事業は事業数こそ少ないものの、多くの参加者が集まる事業を含んでいる。例えば、公民館文化祭などは「地域づくり」に分類されるが、講座形式の事業と異なり参加定員がなく、そのため、事業数では「人づくり」の方が多い一方で、参加人数では「地域づくり」の方が多くなるという状況が生じているものと考えている。続いて、13 ページのボランティア団体については、公民館と何らかの協力・協働関係のある団体を対象として集計している。したがって、団体が貸館利用により独自に活動しているものについては集計対象に含まれていない。

〈若原委員長〉
それでは、ほかにご意見等はあるか。

〈深田委員〉
令和５年度インターネット市民意識調査の結果を見ると、公民館の利用目的では「ロビーや共有スペースなどの利用」が２番目に多くなっている。また、「特に理由はない／なんとなく立ち寄る」を合わせると 15%程度となっており、公民館を利用するきっかけづくりが重要であると感じている。１月の審議会において、私は使用料の徴収については賛成の立場で、公民館の使用料の見直しがこれまで行われてきたのか質問した。生涯学習総合センターについては使用料の定めについて説明があったが、公民館の使用料の取扱いについて改めて確認したいと思う。使用料の徴収によって利用状況に変化が生じるのであれば、その結果として生まれたスペースを学習や交流の場として有効活用することも考えられるのではないかと思う。例えば、近年は夏の暑さが厳しくなっているので、公民館を学習スペースとして小・中学生に開放するなど、「公民館に行けば涼しく過ごせる」といった認識が広がれば、来館のきっかけづくりにもつながるのではないか。

〈若原委員長〉
公民館の利用目的という観点から、ご提案をいただいたかと思う。事務局、いかがか。

〈事務局〉

夏休み期間中の取組として、今年度は 11 館でロビーや共有スペースなどを開放している。子どもたちが学習の場として利用できるほか、公民館利用者以外の方も気軽に立ち寄り、涼しく過ごせる場所として活用していただけるよう取り組んでいる。また、使用料についてだが、生涯学習総合センターを除く公民館については、条例上、使用料は設定されていない。

〈若原委員長〉

使用料については、いろいろなご議論があると思うので、この場では、後ほど機会があれば慎重に議論したいと思う。一方で、公民館については、多くの方が気軽に利用できることが大切であり、その点は今後も考えていく必要がある。ほかにご意見等はあるか。

（意見なし）

それでは、本日の議事は以上とさせていただく。

10　閉会

モデル公民館事業

■事業概要

各公民館の特色を生かした運営の実践・検証に取り組む公民館を「**さいたま市モデル公民館**」として指定し、公民館ビジョンに掲げている、地域住民と共に、これからの「地域の未来をつくる学びの拠点」として、公民館をシン力させることにより「さいたま地域づくりプロジェクト」（人づくり・つながりづくり・地域づくり）を推進させるもの。

■公民館を取り巻く状況

・令和５年に策定された「第４期教育振興基本計画」において、**「地域コミュニティの基盤を支える社会教育の推進」**が目標の一つとなっており、**持続的な地域コミュニティの基盤形成に向けて、公民館等の社会教育施設の機能強化、社会教育人材の養成・活躍機会拡充、地域課題の解決に向けた関係施設・施策**との連携が基本施策となっている。

（社会教育を通じた地域コミュニティの基盤形成）

○　**社会教育は、地域住民が共に学ぶものであり、地域コミュニティ形成の営み**という性格を強く有している。近年、防災、福祉、産業振興、文化交流など、広義のまちづくり・地域づくりに関する多様な行政分野において、その地域課題の解決に向けて、関係省庁が地域コミュニティに関する政策を提示している。これらの政策は **地域コミュニティが維持されていてこそ機能するもの**であり、**社会教育の役割が重要**となる。

○　地域において人々の関係を共感的・協調的なものとするためには、 **社会教育による「学び」を通じて人々の「つながり」や「かかわり」を作り出し、協力し合える関係としての土壌を耕しておくことが求められる。こうして形成された地域の人々の関係は持続的な地域コミュニティの基盤**となり、ひいては社会全体の基盤となる。「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の循環が生み出されることにより、地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイングの向上がもたらされる。地域で人と人とのつながりを作り、協調的な幸福感を紡ごうと取り組んでいる人たちが自信と誇りを持つことができるようにしていく必要がある。

■本市公民館の現状と課題

・本市の公民館においては、令和３年に策定した公民館ビジョン（令和３年度～令和１０年度）に基づき、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」を掲げ、地域の未来をつくる学びの拠点として、「さいたま地域づくりプロジェクト」を推進してきた。

・地域を共につくり、暮らしを助け、地域課題を解決する拠点となる**「地域づくり」**に関しては、現状、きっかけづくりや意識向上を図っているが、地域住民による地域課題の解決に向けた取組は少ない状況である。

⇒持続的な地域コミュニティの基盤を形成するためには、公民館として社会教育に求められる役割を果たさなくてはならない。そのため、今までの取組の枠を超えた**新たな公民館モデル**を構築し、公民館の機能強化を図ることで、他の公民館を牽引していく事が必要である。

モデル公民館事業

■モデル公民館事業による効果

①社会教育の学びの場である公民館に必要性、楽しみ、仲間づくり、生きがい、社会貢献など、主体的な様々な要因や意図の下、多様な地域住民が集まりコミュニティを形成する。
②コミュニティを形成する全ての人たちが学びを通じた他者との相互のつながりによって、自ずと共有意識や信頼関係、地域への愛着や社会への自発的な貢献意識がはぐくまれる。
③コミュニティを形成する全ての人たちが互いに学び合う中で、地域や社会の課題に当事者意識を持ち、その解決に向けて自ら考え、行動する力を養うことができる。学びの楽しさや、課題解決に向けた実践を通じて得られた気付き、達成感、充実感、連帯感などは、更なる学習意欲の喚起につながり、継続的な学びや活動の実現に資する。
こうした地域や社会との関係性の下で、学びや活動を継続することは、**地域コミュニティを形成、維持する基盤**ともなる。

社会教育施設としての公民館の機能強化 ⇒ 地域社会で生活している、子どもからシニアまで幅広い年齢の方、外国人や障害のある方、子育て中の方など多様な人々が集う**持続的な地域コミュニティの基盤形成につながる。**

効果①

④モデル公民館事業を検証したうえで成果報告を行い、他の公民館にも展開していく。

公民館の活性化及び公民館職員のスキルアップ ⇒ **全市的な公民館のシンカ**

- **地域の課題を住民と一緒に考え解決していく公民館**
- **誰一人取り残すことなく生涯学習の機会を提供できる公民館**

効果②

「さいたま地域づくりプロジェクト」（人づくり・つながりづくり・地域づくり）の推進

モデル公民館実施による新旧比較イメージ図



生涯学習総合センター

現在の公民館（旧）

運営・維持管理 ・ 主催事業

【課題】

・高齢の施設利用者・講座参加者の比率が高い。

・貸館による施設利用者が多い。
（サークル内での限られた交流）

公民館は地域住民に対して
学習機会（講座等）を提供

時代の要請
への対応

生涯学習総合センター

モデル公民館（新）

運営・維持管理 ・ 主催事業

＋

新しい公民館モデルの実践・検証

・**インクルーシブな公民館**

多様な世代や背景を持ったすべての地域住民が集い、つながりづくりができる場所

・**持続的な地域コミュニティの基盤形成**

地域の実状に合わせ、地域住民とともに特色を生かした**地域課題の解決**に向けて取り組むことで、地域コミュニティの基盤を形成する

①地域課題を住民主体で解決を図る取組を実施（講座＋学んだ成果を生かす取組、関係者同士の交流）。
②公民館は（主体ではなく）課題解決に向け、住民主体の活動のコーディネート及び交流・連携が生み出されるように調整。





モデル公民館事業①／日進公民館

■事業名称

「日進ＭＩＲＡＩプロジェクト」～インクルーシブな地域社会の実現に向けて～

■事業内容

「日進MIRAIプロジェクト」と称し、学校や障害者施設との連携強化やオンラインによる講座実施などにより、障害者、子育て中の保護者、若い世代など、これまであまり公民館を利用していない方々を取り込む企画を行うことで、幅広い人々が主体的に活躍する企画を創出できる公民館を目指します。

その足掛かりとして、本事業期間においては地域課題の一つである防災教育を取り上げ、地域住民を主体とした講座の企画・運営を行います。

■令和7年度の主な実績

・防災講座実施に向けた「市民企画グループ」を立上げ、連続定期講座の検討会議を3回開催

・埼玉大学教育学部附属特別支援学校との交流事業を9月から11月に4回実施（参加者535名）したほか、次年度に向けて児童生徒を対象とした生涯学習事業の実施を検討

・大学生による「わくわく遊び広場」を9月から12月に4回実施（参加者51名）

・音大生等によるバリアフリーミニコンサートを11月と3月に実施（参加者92名）

■令和8年度の主な計画

・市民企画による防災講座「わが家のゆるっとぼうさい～ゲームや体験で楽しく学ぼう！～」の実施

・「障害者交流イベント～埼玉大学教育学部附属特別支援学校と日進職業センターの取組～」の実施

・大学生による「わくわく遊び広場」の実施

・音大生等によるバリアフリーミニコンサートの実施

モデル公民館事業②／常盤公民館

■事業名称

子どもまんなか常盤公民館「子どもの居場所づくり」

■事業内容

常盤公民館では、子どもや保護者、地域住民の皆様が日常的に気軽に関わり、交流できる「第3の子どもの居場所（家庭でもない学校でもない地域の居場所）づくり」を進めています。その中核として、地域と協働しながら「ふらっときわ」をはじめとする取り組みを「子どもまんなか常盤公民館」として展開します。

本事業の実施にあたっては、これまでのサークル活動を基盤とした学びや交流の機会を再構築・拡充し、多世代のつながりを促進します。これにより、公民館を起点とした地域づくりの担い手を育成・支援し、地域社会の活性化を目指す一連の取り組みを、本モデル事業の核として推進してまいります。

■令和7年度の主な実績

・こどもの居場所 「ふらっときわ」の開設

地域の学生や大人たちがボランティアとして主体的に参画し、地域全体で子どもの健やかな成長を支える「子どもの居場所 ふらっときわ」を10月に開設しました。全23回開所し、延べ71名の児童が利用しました。本事業は地域住民の発案によるものであり、地域自治会からの備品貸与協力を得て運営体制を整えました。

・「戦後80年　タイムカプセルプロジェクト」

小中学生10名が子どもボランティアとして司会・発表を主体的に牽引し（参加者49名）、平和への想いを込めたタイムカプセル（戦後90年開封）を通じて、公民館の理念に基づいた「平和」の次世代継承事業を実施しました。

■令和8年度の主な計画

・子どもや若者の居場所の拡充

・「ハピとき」「マジカルときわツアー」等、子どもまんなか常盤公民館の展開





さいたま市公民館ビジョンの総括に向けて

公民館アンケートから見える成果と課題

1 概要

本稿の目的

本稿は、公民館アンケートの回答をもとに、現行ビジョンの下で行われてきた実践の成果と課題を整理し、ビジョンの総括と次期ビジョンの作成に向けた検討に用いるものである。各館の優劣の評価ではなく、市民の学びを支える公民館の役割と、それを実現する条件を明らかにすることを目的とする。

検討に当たっては、各館の実践をビジョンに照らして捉えるとともに、ビジョンの内容や説明、推進方法が、現場の判断と支援にどのように役立っているかにも目を向ける。実践上の困難を各館の努力や理解の問題だけに帰すのではなく、ビジョンの説明を明確にする必要があるのか、運営方法や実施条件を改善する必要があるのかを区別して考える。

現行ビジョンとの関係

現行ビジョンは、公民館が住民と共に「地域の未来をつくる学びの拠点」となることを掲げている。その具体化として「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の 3 つの行動目標を示し、市民に寄り添いながら、学びと活動を支えることを求めている。また、学び直すことと、学びを生かして行動することが連鎖する「学びと活動の循環」を重視している。

本稿では、これらの方向性に照らし、事業を実施したかだけでなく、住民の学びや関係にどのような変化が報告されているか、公民館がその過程をどのように支えたかを確認する。併せて、職員の専門性や相談体制など、ビジョンが示す役割を実践するための条件を検討する。

調査の概要	内容
分析対象	59 公民館と生涯学習総合センターの計 60 回答
振り返りの対象	令和 3（2021）～7（2025）年度。回答には期間外の実績や予定も含まれるため、区別して読む。
主な内容	ビジョンの活用、3 つの目標、学びの循環、利用につながりにくい層、実施体制、今後の見直し

全体から見える主なポイント

① 個人が学び続けること、気軽な交流、住民による共同企画、地域での活動など、多様な実践が報告されている。これらは、現行ビジョンが重視する価値を具体的に示している。新しい団体や活動が生まれることに加え、日々の学びや関係が維持されることにも意義がある。

② 成果や公民館の役割の捉え方には違いが見られる。個人の学びと地域活動の関係、住民の主体性と職員の支援の関係、地域課題への関わり方などについて、具体的な実践に即して共通理解を深める必要がある。

③ 相談・調整・継続支援には、人員、時間、専門的な相談、経験の引継ぎが必要である。理念を掲げることと、それを実践する条件を整えることを併せて考える必要がある。

2 ビジョンはどのように活用されてきたか

公民館側の自己評価

ビジョンの活用と 3 つの目標について、「おおむね」とする回答が中心であった。「地域づくり」は、他の 2 目標に比べて難しさを感じる回答が多くなっている。ただし、目標ごとに評価の基準が同じとは限らず、数値だけで成果の大小を比較することはできない。

項目	十分	おおむね	あまり	できず
ビジョンの活用	6	46	7	1
人づくり	3	55	2	0
つながりづくり	5	48	6	1
地域づくり	3	40	15	2

単位は回答件数、各項目 60 回答。「十分」「おおむね」「あまり」「できず」は選択肢の略記である。活用は「十分活用されていた」～「活用されていなかった」、3 目標は「十分進めることができた」～「進めることができなかった」の 4 段階である。

目的を考え、共有する手掛かりになっている

ビジョンの策定目的には、公民館の中長期的な目標を明確にし、住民と共有することが含まれている。そのため、館内で内容を確認するだけでなく、住民や関係団体と事業の目的を話し合い、実践の判断に生かすことが重要である。掲示や説明を行ったことと、関係者が意味を理解し、共に考えるようになったことは区別して捉える必要がある。

自由記述には、計画の作成時に 3 目標を意識したことや、行事・講座の目的を職員や関係者で共有したことが記されている。ビジョンが、事業の目的を説明する共通の言葉として使われていることがうかがえる。

目標を当てはめることと、実践に生かすことを分けて考える

3 目標は、公民館が担う役割を示すものである。同じ事業が、学習機会の提供と交流の促進、地域活動への支援に同時に関わる場合もある。したがって、一つの分類に当てはめることを優先すると、その実践が持つ複数の意味を捉え損なうおそれがある。分類を行う場合にも、事業のねらいや支援内容を説明する手段として位置付ける必要がある。

一方、事業をどの目標に分類すべきか迷う、地域づくりの意味を捉えにくいといった回答もある。これは職員の理解だけでなく、ビジョンの説明や、計画・評価の方法を見直す材料である。

事業を 3 目標に分類することに加え、「誰のどのような学びを支えるのか」「住民とどう考えるのか」「どのような支援が必要か」を話し合う指針として用いることができることが重要である。

《留意事項》

低い自己評価でも、住民主体の活動や継続的な交流が具体的に記される場合がある。逆に、高い自己評価であっても、記述だけでは成果を十分確認することができない場合がある。評価の基準や設問の受け止め方が異なる可能性があるため、数値と回答全体を併せて読む必要がある。

今回の調査は、ビジョン策定前との比較や効果の検証ではない。報告された成果を、すべてビジョンによって生まれたものと断定することはできない。

3 学びとつながりに見られた成果

ここでは、回答から学びの支援の工夫を具体的に読み取ることができる実践を整理する。館全体の優劣を示すものではなく、各館の地域条件に応じて参考にすることができる事例である。変化は、公民館側が把握・報告した内容として示す。

人づくり　学び続けることと、自分たちで学びをつくること

ビジョンは、学びのきっかけと多様な学習機会を提供することを人づくりの目標とし、現代的課題についての学習、専門性を生かした学び直し、ICT の活用等を方策としている。個人が知識や経験を広げ、生活の中で考え、行動する力を養うことが、この目標を検討する際の重要な視点となる。

人づくりの回答には、知識・技能の習得に加え、生活の楽しみ、自信、学習意欲、健康行動の変化が記されている。講師や運営者になることだけでなく、一人ひとりの生活の中で学びが生きることを捉える必要がある。

参考事例 1 岩槻城址公民館　継続する学習を支える

パソコン等の講座と、月例の相談サロンを組み合わせている。自主的に学ぶ中で生じた疑問を相談することができ、次の学習につなげる仕組みである。講座の開催後も学び続けることができる条件を整えている点が参考になる。

参考事例 2 常盤公民館　住民が学習の企画に関わる

生活課題を出発点に、住民が学習内容を考え、講師調整や司会などを担う実践が報告されている。公民館は環境面から活動を支えている。住民が自分たちで学びをつくる機会と、それを支える職員の関わりに特徴がある。

つながりづくり　気軽な参加から、関係が育つ

ビジョンのつながりづくりは、誰もが気軽に立ち寄ることができる場をつくり、多様な世代の交流を支えることを目指している。交流行事の参加人数に加え、安心して過ごすことができるか、関係を求める人が他者と出会う機会を得ているか、その後も関係が続いているかを捉えることが必要である。

交流の成果には、団体間の協力だけでなく、安心して話すことができる相手ができることや、日々の気遣いが生まれることも含まれる。同じ場が続き、無理なく繰り返し関わることができることにも意味がある。

参考事例 3 七里公民館　ラジオ体操から広がる関係

申込みをせずに参加できるラジオ体操を通して、講座への誘い合いや、欠席した人の体調を気遣う関係が生まれたと報告されている。参加の入口を低くし、日常的な接点を支える工夫として参考になる。

《留意事項》

参加人数や実施回数は事業の規模を示すが、学びの成果や関係の変化をそのまま表すものではない。「何を知り、考えることができるようになったか」「どのような関係が生まれ、保たれたか」を具体例とともに捉えることが大切である。

4 地域での実践と学びの循環に見られた成果

地域づくり　身近な課題について共に考える

ビジョンは、住民が主体的に課題を発見し、解決に向けて行動することを、公民館が支えるとしている。具体的には、地域課題を見える形にすること、学習機会をつくること、学校や地域団体との仲介を行うことなどを挙げている。したがって、公民館自身が地域活動を主催したかだけでなく、住民の学習や協働をどのように支えたかが検討の中心となる。

防災、子育て、日本語学習、地域文化など、地域との関わりには多様な形がある。行事の開催だけでなく、住民が何を課題として考え、誰と協力するようになったかに注目する。

参考事例 4 日進公民館　防災を住民と共同で企画する

令和 7 年度の会議では、住民の防災企画チームと学習内容を考え、意見が出やすい協議方法を工夫している。職員が企画を用意するだけでなく、住民が考えを出し合うことができるよう支えている点が参考になる。

参考事例 5 大久保東公民館　日本語学習活動を通じて共に暮らす地域を支える

外国人住民が多いという地域の状況を踏まえ、日本語ボランティアの養成、団体の形成、その後の継続的な活動を支援したことが報告されている。講座を開催するだけでなく、学んだ人々が地域で活動するための基盤を整えている点が参考になる。

学びの循環　学習から活動へ、活動から新たな学習へ

ビジョンは、学び直すことと、その学びを生かして行動することが連鎖する「学びと活動の循環」を重視し、公民館を学びの伴走者と位置付けている。本稿でいう学びの循環は、この考え方に基づく。活動の中で疑問に出会い、再び学習することも含め、往復する過程として捉える必要がある。

学びの循環は、3 目標を結ぶ視点である。講座からサークルが生まれる形に限らず、活動の中で新たに学ぶことや、学んだ人が別の人の学びを支えることも含む。すべての人に同じ道筋を求めるものではない。

参考事例 6 南箇公民館　参加者が支える側にも関わる

養成講座から子育てサロンの運営へつながり、さらに、サロンに参加していた母親が運営に関わるようになったと報告されている。学習と活動を通じて関わり方が広がる事例である。支える役割を選ぶことができることと、負担が偏らないことも大切である。

参考事例 7 土合公民館　活動の中に新たな学習を取り入れる

体操講座を契機に成立したサークルの中には、健康に関する講座を自らの活動に取り入れるケースがあると報告されている。公民館は、団体登録の方法や地域包括支援センターとのつながりについて助言している。団体の成立後にも学習機会を取り入れる実践として、「活動から学習へ」という循環を考える手掛かりになる。

《留意事項》

いずれの事例も、地域全体への長期的な効果を検証したものではない。特定の活動を一律に広げるより、目的、住民の希望、支援の方法、実施条件等を併せて共有することが有用である。

5 学びの支援についての考え方を共有する

回答には、学びの支援の役割や成果の捉え方に違いが見られる。以下は、回答に表れた考え方と、そこから検討すべき課題の整理である。回答の説明に検討すべき点があることと、実際に不適切な運用や住民への不利益が生じたことは区別する必要があり、後者を今回の回答だけから認定するものではない。

個人の学びも成果として捉える

ビジョンが地域活動への展開を重視していることと、個人の学びに価値があることは両立する。地域活動への参加につながらないことを理由に学習の価値を低く評価することは、ビジョンの趣旨を狭く捉えることになる。

回答に見られた状況　講座後の団体化や地域活動への展開に難しさを感じる回答がある一方、その都度参加する学習を希望する声も報告されている。
考えられる課題　団体化や活動参加だけを成果とすると、知識が増える、生活が豊かになる、学び続けるといった価値が見えにくくなる。活動に進まないことを、そのまま学習の不足とみなすことは適切ではない。
改善を考える方向　個人の学び、関係の形成、地域での活動を、それぞれの価値と相互のつながりから評価する。本人が希望に応じて学び方や関わり方を選ぶことができるようにする。

住民の希望を聞き、共に学習課題を考える

ビジョンには、市民のニーズへの対応と、現代的課題に応じた学習機会の提供の両方が示されている。いずれかのみでは十分でなく、生活上の経験と学習のテーマを結び付ける対話が必要である。

回答に見られた状況　明確な要望がないことを理由に地域課題の学習機会を設けない考え方や、特定のテーマを希望する人が少ないことへの戸惑いが見られる。また、館側が目指す活動と住民の希望をどう調整するかも課題となっている。
考えられる課題　表明された要望だけでは、声を届けにくい人の困り事や、まだ言葉になっていない課題を捉えにくくなる。他方、職員が望ましい姿を一方的に決めることは、本人の選択を狭めるおそれがある。
改善を考える方向　日々の対話や関係機関との連携から生活上の困り事を捉え、住民と共に学習の内容を考える。人権や共生などのテーマは、参加人数だけで価値を判断せず、暮らしとの接点や伝え方を検討する。

地域課題を学ぶ役割と、解決を担う役割を整理する

ビジョンの地域づくりには、課題解決に向けた学習機会の提供と、人や関係機関をつなぐ役割が含まれる。課題の解決を約束できないことを理由に学習課題として扱うことまで控えるなら、この役割が狭まるおそれがある。

回答に見られた状況　地域課題を取り上げると解決を求められることへの懸念から、関与に慎重な考え方が見られる。
考えられる課題と方向　学習の機会をつくることと、公民館が課題の解決を全面的に引き受けることは異なる。公民館には、住民が状況を理解し、考えを持ち寄り、関係部署等と話し合うことができるよう支援する役割がある。その際、関係部署等が担う制度・施策上の対応との役割分担を明確にし、行政の責任を住民活動に置き換えないことが重要である。

6 参加しやすさと主体的な活動を支える

参加・継続しにくい理由を、本人の意欲だけで説明しない

利用につながりにくい層として、若者を挙げた回答は 50 件、働く世代は 46 件、外国ルーツの方は 35 件、障害のある方は 33 件であった（全 60 回答、複数回答）。

具体的には、移動手段、階段などの施設条件、希望する時間に利用できないこと、団体登録の条件などが報告されている。日時を変えても参加層が広がらなかった事例もあり、一つの変更だけで解決するとは限らない。

参加しない選択を尊重し、学び方を選ぶことができる条件を整える

ビジョンの「誰もが」という方向性は、すべての人に同じ事業への参加を求めることを意味するものではない。学習を希望する人が、必要な情報を得て、自分に合う方法で学習することができる条件を整える視点から具体化する必要がある。オンラインと対面の活用、使いやすい環境の整備も、現行ビジョンに既に示されている方策である。

公民館を利用しない人すべてに参加を求めることが目標ではない。必要な情報を得て学び方を選ぶことができることと、希望があるのに参加できない条件を改善することを重視する。障害のある人等を対象とする講座に加え、通常の講座の情報・教材・進め方を工夫する視点も必要である。

参考事例 8 馬宮公民館　出張講座で学びの入口を広げる

移動が難しい地区の自治会館で講座を行い、それまで参加できなかった住民から肯定的な声を得たと報告されている。来館を求めるだけでなく、学習機会を住民に近づける工夫である。

自主性を尊重することと、支援を控えることを分ける

ビジョンは「市民に寄り添いサポートする」役割を明記している。自主的な活動とは、あらゆる手続きや困難を住民だけで処理することを意味するものではない。何を行うかを決めるのは住民であり、その意思を実現するための情報提供や調整を職員が担うことは、主体性の尊重と両立する。

団体が公民館に頼り切ることへの懸念がある一方、講師探し、手続き、場所の確保、運営の相談が活動を支えた事例もある。職員が決定を代行し続けることと、学習者本人が選び、決めることができるよう条件を整えることは異なる。

新しい会員を受け入れにくい団体についても、定員、活動内容、運営負担などの事情を確かめる必要がある。加入を一律に求めるだけでなく、別の団体・他館・別の学習機会へつなぐ方法も考えられる。担い手に無理が生じる場合には、役割分担や活動の規模も見直す。

運営上の困難と、その原因の推測を区別する

無断欠席等への対応の負担や、何らかの罰則の設定による解決を求める意見も回答にある。ただし、罰則の有無が原因か、その設定が改善に有効かについては検証されておらず、本調査からその妥当性を議論することはできない。この点については、現場の困難を受け止めつつ、連絡方法や予約運用などを、負担の軽減と学習機会の確保の双方から検討することが重要である。

7 実践を続けるために必要な条件

実践を支える条件は、各館の努力と併せて検討する必要がある。問 7 では、実施・継続の困難として次の項目が選ばれている。

実施・継続の困難	回答数
人員不足	40
予算不足	30
利用者ニーズの把握	27
企画・運営の知識やノウハウの蓄積・継承	20
時間不足	19

60 回答、複数回答。上位 5 項目を掲載。回答者が認識する困難であり、必要な増員数や予算額を算定したものではない。

相談・調整・継続支援の時間を確保する

自由記述には、施設管理や日常業務への対応が、住民との対話や新しい企画を難しくしているという報告がある。講座の企画・開催に加え、相談、人の紹介、条件調整、活動の見守りも業務として位置付け、業務の優先順位や分担を検討する必要がある。

具体的な実践を共に検討できる体制をつくる

ビジョンの推進体制は、職員が地域課題を捉え、住民と対話し、学びと活動をつなぐ力を高めることを求めている。また、社会教育主事が中心となって仕組みを整え、専門的な助言のもとで各館の特色を生かす体制を示している。研修の開催に加え、相談によって現場の判断や支援がどう改善されたかを振り返ることが重要である。

役立った体制として、職員間の情報共有・相談が 50 件、他館との情報交換が 41 件挙げられている。一方、他館で好評だった企画がそのまま通用しない事例もある。事業名や講師名だけでなく、地域条件、目的、住民への働きかけ、支援の工夫を共有することが重要である。

専門的な助言や研修の選択数が少ないことだけで、その必要性が低いとは判断することができない。現場の困り事を相談し、実践と理念を結び付けて考えられる支援を、全市的な仕組みとして検討する。

異動を越えて、経験と関係を引き継ぐ

職員の交代により、活動の成立経過や過去の実践が分からなくなるという回答がある。長文の記録を増やすのではなく、代表的な事例について「誰の希望から始まったか」「何を調整したか」「次に配慮する点」を簡潔に残す方法が考えられる。

率直な振り返りを改善に生かす

ここで検討する体制整備は、理念上の課題を人員不足だけで説明するためのものではない。支援の考え方を検討することと、その支援を実施する時間や相談体制を確保することは、双方が必要である。現行ビジョンの推進体制が現場でどのように機能しているかを、実践の具体的な困難と結び付けて考える必要がある。

うまくいかなかった工夫や成果を把握することができていない点も、改善に役立つ情報である。それらの記述を直ちに低評価とすると、率直な報告が難しくなる。学びの支援の考え方を見直すことと、支援を実行できる条件を整えることを併せて進める。

8 ビジョンの総括に向けて検討したいこと

今回の調査では、個人の学び、住民同士の関係、地域での活動を支える多様な実践が報告された。一方、成果や公民館の役割の捉え方には違いがあり、実践を支える体制上の困難も示されている。

総括に当たっては、実践をビジョンに照らして評価するとともに、ビジョンの内容や説明、推進方法が、現場の判断と支援にどのように役立っているかを検討する必要がある。その際、現行ビジョン自体の課題と、理念を具体化する方法や実施条件の課題を区別することが重要である。

以下では、4 つの論点について、現行ビジョンの意義と課題、次期ビジョンの作成に向けて検討すべき点を整理する。なお、今回の調査から、報告された成果や困難がビジョンによって生じたという因果関係までは確定できない点に留意されたい。

論点１　何を成果として大切にするか

現行ビジョンの意義

現行ビジョンは、生涯にわたって学び続けることの価値を示すとともに、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の 3 つの行動目標を掲げている。また、学び直すことと、学びを生かして行動することが連鎖する「学びと活動の循環」を重視している。公民館の成果を、講座の開催だけでなく、個人の成長、住民同士の関係、地域での協働まで含めて捉える枠組みを示した点に意義がある。

調査には、知識・技能の習得や自信、日常的な気遣い、住民による共同企画、活動を通じた新たな学習などが報告されている。これらは、ビジョンが重視する多様な価値を具体的に示す実践である。

調査結果から見える課題

一方、講座後の団体の結成や地域活動への参加を重く見ると、個人の学びや、既にある関係を維持することの価値が十分に捉えられないおそれがある。回答には、サークル化の難しさを指摘する記述と、その都度参加する学習を希望する住民の声の両方がある。

現行ビジョンは個人の学びの価値も示しているが、「人づくり」「つながりづくり」から「地域づくり」へという説明は、地域活動を最終的な到達点として受け止められる余地がある。また、自己評価と具体的な実践の記述が一致しないケースもあり、何を成果として評価するかについて、共通理解を深める必要がある。

次期ビジョンに向けて検討したいこと

個人の学び、関係の形成・維持、地域での活動は、それぞれに価値があることを明確にする必要がある。そのうえで、3 目標を一方向の段階としてではなく、相互に関係し合うものとして説明することが重要である。学びの循環についても、活動から学習に戻ることや、本人の希望に応じて関わり方が変化することを含めて示すことが考えられる。

審議会では、参加人数や団体数に加え、学習内容の深まり、生活の充実、関係の維持、希望する活動の実現などを、どのように成果として捉えるかを検討したい。地域づくりを重視する方向性を継承しながら、地域活動への参加を、個人の学びを評価する条件にしない整理が求められる。

論点２　公民館の役割をどう分かりやすく示すか

現行ビジョンの意義

現行ビジョンは、公民館を「地域の未来をつくる学びの拠点」と位置付け、住民が主体的に課題を発見し、解決に向けて行動することを、市民に寄り添って支援するとしている。具体的な方策には、地域課題を見える形にすること、学習機会をつくること、学校や地域団体との仲介、人や地域をつなぐ支援が挙げられている。

調査にも、住民の希望を聞く、講師や団体を紹介する、活動場所を確保する、手続きや運営を支えるなどの実践が報告されている。公民館の役割を、事業の主催や施設管理に限定せず、住民の学びや活動を支える仕事として捉えるうえで、現行ビジョンは重要な方向を示している。

調査結果から見える課題

一方、地域課題を取り上げることへの慎重さや、住民の自主性を尊重するために支援を控えようとする考え方など、役割の解釈に違いが見られる。

仲介・調整の役割は現行ビジョンにも示されているが、住民の希望が明確でない場合にどう働きかけるか、職員の支援と住民自身の決定をどう両立させるかについて、日常の判断に用いることができる説明が必要である。また、地域課題を学習として扱うことと、公民館がその解決を全面的に担うことを区別し、公民館による学びの支援と、関係部署等が担う制度・施策上の対応との役割分担を明確にする必要がある。

次期ビジョンに向けて検討したいこと

公民館の役割を、希望や困り事を聞く、住民と共に学習課題を考える、人や機関をつなぐ、活動の実現に必要な条件を整える、継続を支えるといった具体的な仕事として示すことが考えられる。

その際、住民主体とは、住民だけですべてを処理することではなく、必要な支援を受けながら自ら判断することであると説明する必要がある。同時に、職員が望ましい姿を一方的に決めることを避け、住民が異なる意見に触れ、自ら考える過程を支えることを明確にしたい。

審議会では、公民館が担う学びの支援と、関係部署等による制度・施策上の対応をどう結び付けるかを検討したい。理念の言葉に加え、判断に迷う場面の具体例を示すことにより、現場と住民の双方が役割を理解することができる構成が求められる。

論点３　学びを選び、参加することができる条件をどう整えるか

現行ビジョンの意義

現行ビジョンは、多様な人々が相互に理解し合い、共生する地域社会を目指し、誰もが気軽に立ち寄ることができる場をつくるとしている。また、情報提供、オンラインと対面を組み合わせた学習、情報格差の解消、使いやすく居心地のよい環境など、学習機会を広げる方策を示している。

調査で報告された出張講座や会場変更などは、住民の参加を困難にしている条件に働きかけた実践である。こうした支援を成果として捉えるうえで、「誰もが」というビジョンの方向性は重要な基準となる。

調査結果から見える課題

調査では、移動手段、施設、時間帯、利用条件、情報の届き方など、講座の内容や募集方法だけでは対応しきれない困難が報告されている。幅広い対象の講座を用意することと、希望する人が実際に参加することができる

ことは、区別して確認する必要がある。

また、現在の利用者の希望を主な手掛かりとする場合、公民館に来ていない人の経験を捉えにくい。参加や継続の難しさを本人の意欲や性質によって説明する記述もあるが、今回の調査から、その理由を確定することはできない。

次期ビジョンに向けて検討したいこと

「誰もが」という方向性を、対象の広さだけでなく、情報を得る、参加を申し込む、実際に参加する、学習を継続するという各段階の条件から具体化する必要がある。

その際、参加を希望しない場合と、希望があっても参加することができない場合を区別することが重要である。ただし、必要な情報や学習に触れる機会がなければ、希望を表明すること自体が難しい場合にも留意する必要がある。

審議会では、現在の利用者の声に加え、声を届けにくい人の経験や困り事をどのように捉えるかを検討したい。また、対象別の講座に加え、通常の講座や施設利用における情報、教材、進め方、設備等の改善をどう進めるか、個別の配慮と施設・制度としての改善をどう組み合わせるかを整理する必要がある。オンライン化など既存の方策についても、誰の学習機会を広げ、どのような困難を残しているかを確認することが求められる。

論点４　理念を実践するための体制と振り返りをどう整えるか

現行ビジョンの意義

現行ビジョンの推進体制では、職員が地域課題を捉え、住民と対話し、学びと活動をつなぐ力を高めることが求められている。また、社会教育主事が中心となって仕組みを整え、専門的な助言のもとで各館の特色を生かした運営を行う体制が示されている。理念の実現には、職員の専門性と組織的な支援が必要であることを位置付けた点に意義がある。

調査では、職員間の相談や他館との情報交換が実践に役立ったとする回答が多い。現場の経験を共有し、共に考えることが、学習支援の基盤となっていることがうかがえる。

調査結果から見える課題

一方、人員や時間の不足、施設管理等の業務負担、職員異動による経験の継承の難しさが報告されている。ビジョンが求める対話・調整・継続支援を、日常業務の中でどのように実施するかが課題である。

現行ビジョンは力量向上や専門的支援の方向を示しているが、それを支える時間、業務分担、相談の仕組み、記録・継承について、実施段階での具体化が必要である。また、研修や専門的助言の選択数だけから、支援の必要性や有効性を判断することはできない。どのような支援が、現場の判断や実践の改善につながったかを捉える必要がある。

次期ビジョンに向けて検討したいこと

職員に求める役割と、その役割を実行するための条件を併せて示す必要がある。社会教育主事等への相談、館同士の事例検討、現場の課題を全市的な運営に反映する仕組みを具体化することが考えられる。

経験の共有では、事業名や講師情報だけでなく、住民の希望、地域条件、支援の判断、実践の経過を伝えることが重要である。また、成果だけでなく、実現しなかった希望や、うまくいかなかった工夫も改善に生かす振り返りを位置付ける必要がある。

審議会では、相談・調整・継続支援の時間をどう確保するか、異動時の引継ぎをどう支えるか、記録の負担を過度に増やさずに学び合う方法をどう整えるかを検討したい。新たな業務を追加する際には、既存業務の整理や負担の軽減も同時に考えることが求められる。

《留意事項》

以上の論点は、すべてを新しい目標として追加すべきことを意味するものではない。現行ビジョンから継承する点と、説明や実施方法を改善する点を分け、次のように整理することが有用である。

区分	主な検討事項
継承する点	生涯にわたる学びの価値、3 つの行動目標、学びと活動の循環、市民に寄り添う支援、専門性を支える体制
説明を明確にする点	3 目標の相互関係、個人の学びの価値、住民主体と職員の支援の関係、公民館と関係部署等の役割分担
実施方法を具体化する点	希望や困り事の把握、相談・仲介・継続支援、参加条件の改善、館同士の学び合い、経験の継承
評価を改善する点	事業の実施と住民に生じた変化の区別、人数だけに依存しない成果把握、困難や失敗を改善に生かす振り返り

ビジョン本文には、共有すべき理念、公民館の役割、推進体制の基本を示し、実施計画や運営資料には具体的な方法を示すという役割分担も考えられる。現場が判断に用いることができ、住民にも公民館の役割が伝わる内容とすることが重要である。

なお、今回の調査で把握したのは、公民館側が報告した実践、成果の認識、支援上の困難である。住民自身の評価、未利用者の希望の分布、学習の長期的な効果、施設・人員・予算の適正規模は確定できない。調査から確認された事項と、審議会として検討・判断する事項を区別しながら、次期ビジョンの方向性を整理する必要がある。

次期さいたま市公民館ビジョンに向けたアンケート（公民館用）

調査の目的

この調査は、令和 3〜7 年度の各公民館の取り組みを振り返り、現行のさいたま市公民館ビジョンの 3 つの行動目標である「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」と、それらをつなぐ「学びと活動の循環」について、成果と課題を整理するものです。回答は、次期さいたま市公民館ビジョンと今後の公民館運営の検討に生かします。

このアンケートは各公民館の優劣を比較・順位付けすることを目的とするものではありません。成果があったことだけでなく、取り組みにくかったこと、試行錯誤していること、状況を十分に把握できていないことも、率直にお聞かせください。

回答に当たって

- 各公民館として 1 件ご回答ください。可能な範囲で、職員間の経験や意見を持ち寄ってください。
- 令和 3〜7 年度について、手元の記録や把握している範囲で、重要な点に絞ってご記入ください。箇条書きでも構いません。
- 各問の補足や例は、回答を考える際の手がかりです。すべてについて書く必要はありません。
- 「該当する取り組みがない」「変化を把握できていない」「判断が難しい」という回答も可能です。分かる範囲で、その事情を添えてください。
- 同じ内容を繰り返す場合は、「問〇に記載」として構いません。
- 個人の学びや文化活動そのものの価値も大切にします。地域活動につながったかどうかだけで、成果を判断するものではありません。

公民館名　〔　　〕

問 1　ビジョンの考え方の活用と共有について

（1）現行ビジョンの活用について

「人づくり・つながりづくり・地域づくり」などのビジョンの考え方は、公民館運営や事業企画にどの程度活用されていたと思いますか。当てはまるものを 1 つ選択してください。

☐　十分活用されていた
☐　おおむね活用されていた
☐　あまり活用されていなかった
☐　活用されていなかった

(2) 現行ビジョンの共有について

職員間や住民・団体との間で確認したり、話し合ったりする機会はありましたか。また、その考え方が、事業の企画や公民館の運営に役立った場面はありましたか。

役立ったことに加え、意味を理解しにくかったことや、実際の業務でどう生かすか迷ったことがあれば、具体的にお書きください。

例えば、事業計画の作成、職員間の打合せや引継ぎ、住民・団体との相談などの場面を振り返ってください。ビジョンを特に意識する機会がなかった場合は、その旨をご記入ください。

〔自由記述欄〕

問 2　「人づくり」について

ここでは、公民館が提供した学びの機会と、それを通じて利用者に見られた変化についてお尋ねします。

(1) 取組状況の振り返り

令和 3～7 年度を通じて、「人づくり」（人々の学びのきっかけをつくり、魅力あふれる様々な学びの場となること）の取組は、どの程度進めることができたと考えますか。

□　十分進めることができた
□　おおむね進めることができた
□　あまり進めることができなかった
□　進めることができなかった

(2) 学びの機会と、そこから生まれた変化

どのような講座や学習の機会を設け、それによって利用者にどのような変化が見られましたか。成果と考えることを、取り組みの内容と併せてお書きください。

例えば、「知識や技能が身に付いた」「新たなことに関心を持った」「自信が付いた」「生活の楽しみが増えた」「学習を続けるようになった」などです。住民の希望や困り事を学習内容に取り入れたことも含めて構いません。利用者の感想やその後の様子など、何から変化が分かったかも、分かる範囲で添えてください。

〔自由記述欄〕

(3) 難しかったこと・残された課題

講座や学習の機会を設ける際や、利用者の学習を支える際に、難しかったこと、十分に対応できなかったことをお書きください。どのような場面で何が難しかったか、その理由として考えられることもお聞かせください。

例えば、「住民が何を学びたいのか把握しにくかった」「講座の内容が参加者の期待と合わなかった」「参加者の経験や理解度の違いに対応しにくかった」「継続して学べる機会を用意できなかった」「学習後の変化を確認できなかった」などです。

〔自由記述欄〕

問3　「つながりづくり」について

ここでは、公民館での学びや活動、日常的な利用を通じて生まれた、人や団体の間の関係についてお尋ねします。

(1) 取組状況の振り返り

令和3～7年度を通じて、「つながりづくり」（誰もが気軽に立ち寄れる、地域住民のつながりの場となること）の取組は、どの程度進めることができたと考えますか。

□　十分進めることができた
□　おおむね進めることができた
□　あまり進めることができなかった
□　進めることができなかった

(2) 生まれた関係・深まったつながり

公民館を利用する中で、誰と誰の間に、どのような交流や協力が生まれましたか。また、以前からあった関係が深まったり、続いたりしたことはありましたか。その後の様子も、分かる範囲でお書きください。

例えば、「参加者同士が普段から声を掛け合うようになった」「安心して話せる仲間ができた」「異なる世代の交流が続いている」「講座をきっかけにサークルができた」「別々に活動していた団体が協力するようになった」などです。新たな関係が生まれたことだけでなく、既にあった交流や協力を続けられたことも含めてください。

〔自由記述欄〕

（3）難しかったこと・残された課題

人や団体が知り合う機会をつくること、交流を続けること、新たな参加者を迎えることについて、難しかったことをお書きください。その理由として考えられることや、対応を試みたことがあれば、併せてご記入ください。

例えば、「講座中は交流があったが、その後は続かなかった」「いつも同じ人が参加し、新しい人が入りにくかった」「団体同士の交流を呼び掛けても進まなかった」「意見や活動方針の違いを調整することが難しかった」などです。

〔自由記述欄〕

問 4　「地域づくり」について

ここでは、住民が地域の状況や課題を共に考え、暮らしや地域をよりよくする活動に関わるために、公民館が行った支援についてお尋ねします。

（1）取組状況の振り返り

令和 3～7 年度を通じて、「地域づくり」（地域を共につくり、暮らしを助け、地域課題を解決する拠点となること）の取組は、どの程度進めることができたと考えますか。

□　十分進めることができた
□　おおむね進めることができた
□　あまり進めることができなかった
□　進めることができなかった

（2）地域に生まれた動きと、公民館の関わり

どのような地域の状況や課題を取り上げ、住民が学び合ったり、活動したりするために、何を行いましたか。その結果、住民や団体に見られた動きと、その際に公民館が行った支援をお書きください。

例えば、「住民から聞いた困り事について話し合う場を設けた」「講座をきっかけに住民が地域で活動を始めた」「地域団体と学校をつなぎ、一緒に取り組むようになった」などです。課題の解決に至っていなくても、関心を持つ人が増えたことや、関係者が協力し始めたことなどをお書きください。

〔自由記述欄〕

（3）難しかったこと・残された課題

地域の課題について住民と考える際や、住民・団体の活動や協力を支える際に、難しかったことをお書きください。その理由として考えられることや、対応を試みたことがあれば、併せてご記入ください。

例えば、「課題に関心を持ってもらうことが難しかった」「住民の希望と公民館が目指すことに違いがあった」「一部の担い手に負担が集中した」「関係者の役割分担が決まらなかった」「活動を続けられなかった」「公民館がどこまで関わるべきか迷った」などです。

〔自由記述欄〕

問５　学びと活動の循環について

ここでは、学びをきっかけに交流や活動が生まれたり、活動中に生じた疑問や経験から新たな学びが始まったりした経過についてお尋ねします。「学び・交流・活動・新たな学び」のすべてがそろっている必要はありません。

（1）学び・つながり・活動が結び付いた経過

学びをきっかけに交流や活動が始まった経験、または活動した経験から新たな学びが始まった経験を１つ挙げ、どのようにつながっていったかをお書きください。問 2～4 と同じ事例でも構いません。

「最初のきっかけ」「その後に始まった交流・活動・学習」「その間に公民館が行った支援」「その後の状況」の順に書くと、経過が伝わりやすくなります。公民館による支援には、参加先の紹介、関係者の仲介、相談への対応、活動を振り返る機会づくりなどがあります。

〔自由記述欄〕

（2）つながりにくかった場面・支援上の課題

利用者や団体に「もっと学びたい」「仲間と活動したい」「地域で何かに取り組みたい」という希望があっても、実現につながらなかったことはありましたか。また、活動中に生じた疑問や経験を、次の学習や講座に生かすことが難しかったことはありましたか。

どの段階で何が難しかったか、その理由として考えられることをお書きください。(1) とは別の経験でも構いません。

例えば、「希望に合う活動先が見つからなかった」「活動先を紹介したが参加が続かなかった」「活動を振り返って学び合う機会を設けられなかった」などです。その後の状況を把握できていない場合は、その事情をお書きください。

〔自由記述欄〕

問 6　利用・参加のしやすさと、声の届きにくい人への対応について

ここでは、公民館からの情報が届きにくい人や、利用・参加を始めにくい人、続けにくい人についてお尋ねします。そうした人たちがどのようなことに困っているのか、また、参加しやすくするためにどのような工夫を行ったのかについてお聞きします。

（1）利用につながりにくいと感じる層について

現在、公民館の利用や参加につながりにくいと感じる層として、当てはまるものを選択してください。（複数回答可）

□中高生
□若者（大学生・20 代）
□子育て世代
□働く世代
□外国ルーツの方
□障害のある方
□特にない
□その他［　　］

（2）具体的な状況について

公民館からの情報が届きにくい人や、利用・参加を始めにくい、または続けにくい人について、どのようなことが分かっていますか。どのような人が、何に困っているのかをお書きください。また、参加しやすくするために工夫したこと、その結果や、まだ対応できていないことがあればお聞かせください。

例えば、開催時間が合わない、移動が難しい、費用が負担になる、言葉や施設の利用に不安がある、情報を得る手段がない、といった事情です。本人や関係者から聞いたことと、職員として推測していることは、区別してご記入ください。利用していない人の声を聞く機会がなく、実態が分からない場合も、その旨をお書きください。

〔自由記述欄〕

問 7　取り組みを支える体制と、必要な支援について

ここでは、公民館の取組を進める上で役立った体制や仕組み、また、取組の実施や継続に当たり難しかったことについてお尋ねします。

(1) 取組を進める上で役立った体制や仕組みについて

令和 3～7 年度を通じて、取組を進める上で役立ったものを選択してください。(複数回答可)

□ 職員間での情報共有や相談
□ 館内での役割分担や協力体制
□ 社会教育主事等からの助言
□ 他館との情報交換や事例共有
□ 研修への参加
□ 地域団体との連携
□ 学校との連携
□ 行政関係部署との連携
□ ボランティアや協力者の存在
□ 施設・設備
□ その他（　　）

(2) 取組の実施や継続に当たり難しかったことについて

令和 3～7 年度を通じて、取組の実施や継続に当たり課題となったものを選択してください。(複数回答可)

□ 人員不足
□ 時間不足
□ 予算不足
□ 事業の企画・運営に関する知識やノウハウの蓄積・継承
□ 利用者ニーズの把握
□ 関係機関・団体との連携
□ ICT・デジタル活用環境
□ その他（　　）

(3) 特に重要だと考えることについて

(1) または (2) で選択した内容のうち、特に重要だと考えるものについて、その理由や具体的な状況をお書きください。

〔自由記述欄〕

問 8　次期ビジョンに引き継ぎたいこと・見直したいことについて

現行ビジョンの考え方や進め方について、今後も大切にしたいことと、変更・追加・整理した方がよいことを、理由とともにお書きください。

例えば、3 つの行動目標の内容や目標同士のつながり、各地域の実情に合わせた取り組み方、社会や住民生活の変化を踏まえて新たに取り上げるべきことなどです。重要と考える点に絞ってご記入ください。

〔自由記述欄〕